

実践活動事例

◆西地区ブロック

桜	谷	… P57
五	福	… P60
神	明	… P63
四	方	… P66
八	幡	… P69
草	島	… P72
倉	垣	… P75
呉	羽	… P78
長	岡	… P81
寒	江	… P84
古	沢	… P86
老	田	… P89
池	多	… P92

《西地区ブロック民生委員児童委員協議会『活動強化方策地域版 2026～2028』》

1. 高齢者支援の強化: 訪問・見守り・安否確認で孤立を防止
2. 防災体制の整備: 避難所運営・ハザードマップ・マニュアル作成で備えを強化
3. 委員間・団体間の連携強化: 情報共有・協働体制で支援の精度を向上
4. 相談しやすい環境づくり: 住民の声に寄り添う信頼関係を構築
5. 世代間交流の促進: 子ども民生体験・集い・ふれあい活動で地域の絆を育む
6. 委員活動の理解促進: 広報や啓発で役割の認知と安心感を醸成
7. 地域力の底上げ: 気になる人の早期発見と支援につなげる仕組みづくり
8. 共助の文化づくり: 声かけ・避難支援・地域の絆で安心して暮らせるまちへ

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック
桜谷校下民生委員児童委員協議会

(様式1)

【事例4】

能登半島地震における校下・地区民児協の対応について

(1) 地域の特性

私たちの町、桜谷は以前から「呉羽山断層の上にある」とか「すぐ横を呉羽山断層が走っている」とか言われています。そのうえに、町内の北東側の端には神通川を擁しており、地震には敏感な町内とって良いと思います。もし津波が発生し、それが7キロほど遡上し、溢水でもしたらわが町内の半分は消滅するでしょう。そんな危険な地に暮らしています。

(2) 委員として活動した内容（発生時・発生以降）

今年も家族みんな健康で幸であるようお願いするために、遅い時間だが氏神様に初参りした後のことでした。午後4:00も回り老夫婦二人暮らしなので、夕食も済まして帰ろうと横着を決め込み、丸の内付近を走っている時でした。何の前触れもなしに車は左右に揺れ、路上の大きな行き先案内の標識板が前後に揺れ、「地震だ」とわかったときは車を路肩に寄せて止めるのが精一杯でした。

夕食どころではなく、早速帰宅すると家の外見は異常がありませんでしたが、中は台所の鍋やフライパン、食器類などが所狭しに散らばっていました。でも思ったより被害が少なかったと安堵したのもつかの間、自分が民生委員児童委員であることに気づきました。そこで取るものも取り敢えずオレンジベストを身に着け長靴をはいて町内の見回りに出掛けました。積雪がなかったのが何よりの幸いでした。

(3) 地域の様子（発生時・発生以降）

町内はどの家庭も避難の準備で大騒ぎです。当地では冬の午後4時半過ぎといえども薄暗く雪国の風情が漂うのに、きょうは普段とは事情が違い、大勢の人が外に出ています。主人は毛布やら食料を怒鳴り声も混ぜて車に詰め込み、家族を乗せて避難の準備です。車のある家庭では多かれ少なかれこのようでした。歩いて避難する家庭では、1次避難所に指定されている桜谷小学校ではなく、近くのマンションの通路を目指しておられました。

普段訪問している一人暮らしの高齢者のお宅に伺いました。幸いにもお正月とあってかどの家庭も息子さんやら娘さんが帰省されていたので一安心しました。特段、被害もなかったとのことでした。

もちろん、一人で新年を迎えておられる高齢者もおられます。そのような皆さんは異口同音に「避難したくても小学校までは歩けない」と訴えられました。たまたまお住まいが2階以上だったので、津波の高さと海からの距離を勘案すると、現状維持が

一番安全と判断し「今のまま部屋にいて外に出ないように」と指示してその場を離れました。

ただ障害者の家庭では、お母さんが「もし私たちが避難して大勢の人前にでると、この子は奇声を発して暴れるから避難できない」と話されたことが耳に残って離れません。善処策については、今後の課題としたい。

(4) 民生委員としてできたこと、できなかったこと

地震発生当日は、自分では落ち着いているつもりでしたが、やっぱり興奮していたに違いありません。仲間の委員の安否や地域の被害状況などを訊ねる余裕すらありませんでした。翌日になってようやくこのことに気づき電話した次第です。

2日の朝8:30頃、「苦しいからすぐに来てほしい」との電話が一人暮らし高齢者からありました。反射的に「昨日の地震の二次被害か」と頭をよぎり、すぐに駆け付けて救急車を手配しました。当番医の県立中央病院の診断によると、過去からの持病の悪化が原因ということでそのまま入院となり一件落ち着きました。

(5) 地震で感じた課題

いつもの訓練ではない現実の災害なのに、町内の防災担当のメンバーが、誰ひとり公民館に集まることもなく、防災マニュアルも防災組織図も出番がありませんでした。防災ヘルメットも、非常持ち出し品も、棚に飾ったままでした。今までに災害らしい災害に遭遇していない私たちにとって、これが非常時の現実だと思いました。

一日16:40頃の報道機関による富山市沿岸の津波情報では80~200センチとされていたように思います。仮に200センチの津波が発生した場合に、河口から7キロ離れた当地まで田畑・建物・森林・坂道を超えてくるエネルギーがあるとは思えません。被害が及ぶとは考えにくいと思われます。また津波が川を遡上したとしても、神通川の堤防は10メートル近くありますから溢水するとは思えません。ということは当地では避難の必要性はなかったのではないのでしょうか。

交通渋滞を避けるために、市内どこの地域・校下でも「車での避難はやめましょう」というのが原則だったと思いますが、実態は呉羽山や呉羽丘陵へ向かう車で大渋滞となり、さながらパニック状態でした。

この無秩序な実態を見ると、地域・校下での防災マニュアルを作成し、有事の際の行動計画を予め決めておくことも絶対に必要だと思いますが、市が中心となって全市的な防災マニュアルが必要だと思います。

研修会でも、大学の研究者の机上の理論ではなく、実際に被災した方の行動体験談を伺うほうがより有効ではないかと思います。

(様式2)

活動強化方策策定に向けて

(1) 有事の際に委員相互が共通理解した民児協活動ができること

令和6年1月1日の能登半島地震を想起してみます。雪もなくいいお天気で平穏な夕暮れでした。そこに突然の地震。マスコミは一様に「富山湾に津波が来るからすぐに避難しろ」と富山市民はもちろん富山県民に呼び掛けていました。

結果論ですが、委員全員が「今回の津波は最大で2メートルの高さだという情報だから桜谷までは届かないのではないか」という共通理解をしたうえで高齢者宅を訪問したらどんなに気が楽だったかと思います。

したがって、各委員の高齢者に対する対応はまちまちだったので今後、有事の場合に即座に共通理解・対応ができる通信網が必要だと思います。それを策定します。

(2) 地域社会福祉協議会との協力の必要性

民生児童委員協議会も地域社会福祉協議会も目指すゴールは同じです。ただその見回りや支援の対象者に若干の違いがあるだけというべきでしょうか。現状は一人の高齢者に両方でお伺いするケースもあるように聞いています。見回りにムダという言葉はありませんが、高齢者にしてみればとにかく「だれか来ている」という感覚でしょう。

したがって、定期的に町内で両者が会話する必要があるものと思います。

(3) 高齢者の居留守を防ぐ方策の策定

「足腰が不自由で委員が訪問をしても対応ができない」という事情ならよく理解ができます。しかし昨今の詐欺・恐喝・強盗・拘禁などの社会現象を反映しての不在の意思表示であれば民児委員としては辛いです。しかしこれが事故の未然防止という観点からは絶対に有効なので、むしろ我われも勧めています。

アパートにお住いの方はドアののぞき穴からオレンジベストを確認してからドアを開けるといってもおられますが、全てのお宅でこうとはなりません。訪問する前に電話をすとかして、何とか対策を講じたいものです。

挙げればもっともっと方策を講ずるべき課題があるだろうと思います。今後それらをつぶさに検討し、より良い地域民児協として活動していきたい。

<< 桜谷校下民生委員児童委員協議会『活動強化方策地域版 2026～2028』>>

- ① 各町内を担当する委員相互の情報を子細に共有する。
- ② 一人暮らしの高齢者宅の夜の点灯具合、新聞受けからの回収具合を「見守り補助者」の協力を得てこれまでより密に見守る。
- ③ 町内の高齢者に民生委員の仕事を隈なく理解していただくための広報活動。

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック
五福校下民生委員児童委員協議会

(様式 1)

1 事例項目

能登半島地震における校下・地区民児協の対応について

2 事例テーマ

地区住民避難に対する意識調査を行い、今後の対応について検討する

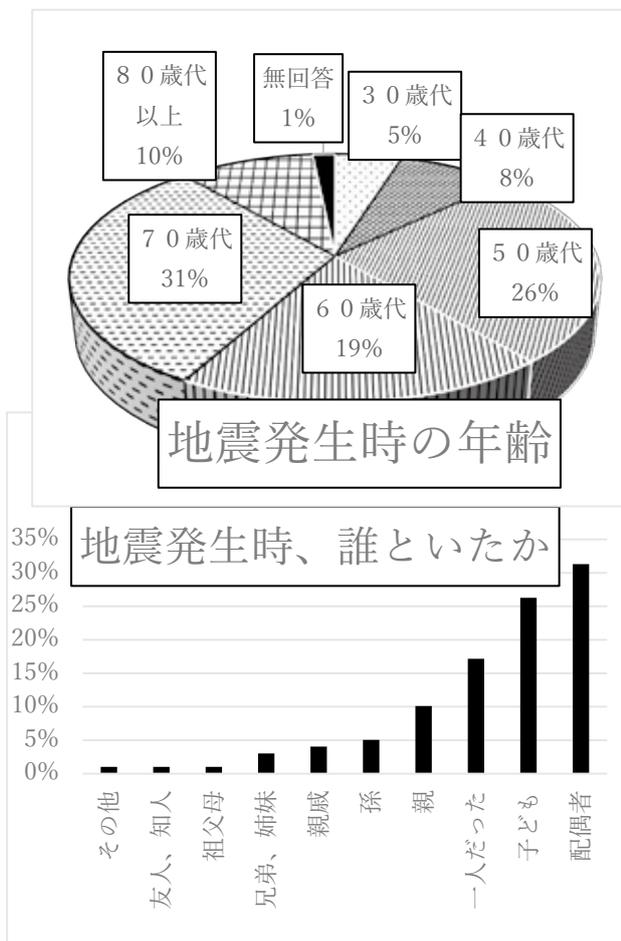
3 概要

(1) 活動の目的等

高齢化が進む地域において、能登半島地震のような災害が起こったときにどう対応すればいいのか、何ができるのかを検討するため、町内会では災害に対するアンケート調査を行った。その結果をもとに、これから災害対策について考察してみた。

(2) アンケートの結果と考察

アンケートは町内会長の主導のもと昨年 12 月に実施、集計された。今回はその中からいくつかを抜粋し、グラフ化してみた。



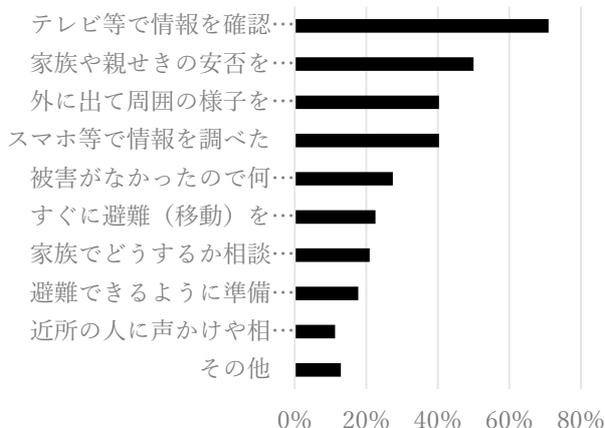
地震発生時、町内には 20 歳代以下の若年層は一人もいなかった。発生したのは元日の夕方であったが、もしそれが平日や日中であった場合、町内には高齢者の割合が圧倒的に多くなっていたと思われる。

災害への対応として、自ら身を守る力、地域の連携による助け合い、国や自治体による施策が必要だが、その中でも民生委員に期待されるのが地域での互助活動であろう。しかし人員構成一つを取ってみても、そこには様々な困難が予想される。

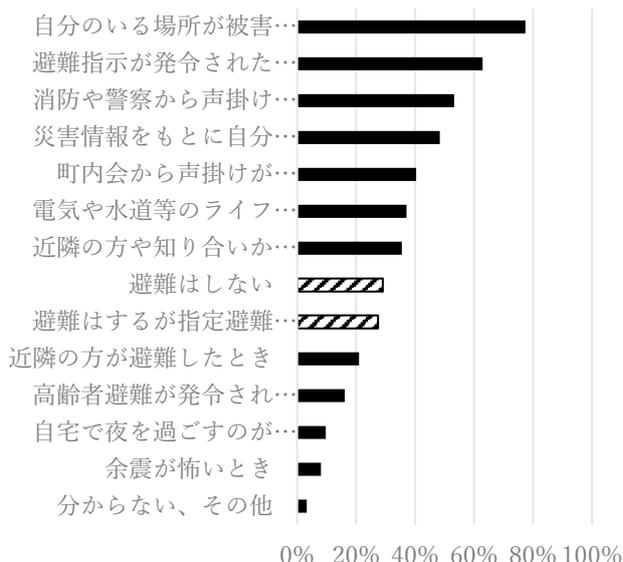
地震発生時、誰と一緒にいたのかという質問には、元日の夕方にもかかわらず「一人だった」人が 17% いた。これも平日の日中であれば、家に一人でいる高齢者はもっと多かったと推測される。

地震直後にとった行動を尋ねると、テレビ等から情報を得ようとした人が 71%、スマホや SNS 等を通して得ようとした人が

地震直後に何をしたか（複数回答）



どんな状況なら避難するか



40%に上った。マスコミから得られる情報は災害の概要を把握するには有効だが、地域限定の情報はなかなか得られない。

私の住む地域は、以前に用水が氾濫し床上浸水を経験した人が多いため、川を遡上するといわれていた津波の影響を心配する声が多かった。そうした地域の具体的な情報を効率的に伝えるには、情報共有のグループを作ること、SNSの活用が難しい人には声を掛け合う「ご近所ネットワーク」が必要だろう。

たとえ大きな地震が起きても「避難はしない」と答えた29%の住民の気持ちは複雑だ。避難を最も困難にしているのは避難場所の遠さである。地域指定避難場所の小学校まで1キロ以上あるため、高齢者の足で災害時にたどり着くことは難しい。近くに避難に適する高い建物もないため、どこに逃げたらいいのかという住民の不安はぬぐえない。

(3) 今後の取り組み

課題は多いが能登半島地震を契機に、災害に対する住民の危機意識は高まっており、町内会長の主導の下、町内では災害対策会議を立ち上げた。個人情報保護等で住民の把握が難しく、地域で声を掛け合っただけの避難活動は困難になっている。それでも今夏の盆休期間を利用して

タオルを使った災害時の安否確認訓練を実施することになった。これは、災害時に「我が家（家族）は無事」という目印に、タオルを玄関や門など外部から分かる場所に掲げてもらうことで、安否確認をスムーズにし、救助を迅速に行おうとする取り組みである。

避難場所の整備やシステムの改善など、国や自治体に期待したい部分が多いが、自らを助けるための災害対策を地域で伝え合い、地域と歩みを合わせることで、被害を最小限にとどめられたら、と考える。



(様式2)

活動強化方策策定に向けて

(1) 見えてきた地域の現状と課題

①地震発生直後に「我が家は無事」確認方法

- ・従来ならば、地域の安全担当者が各家を訪問して安全確認する。

この方法では時間が掛かる。さらに効率よくするには家の外の目立つところにタオルを掲げることで一次確認が早くでき、次の対応が早くなる。

②具体的な地域の情報がない

- ・自宅待機や、避難指示がないのでどうしたらよいかわからなかった。

これには情報共有のネットワークで対応可能。但し、SNSを使えない人の対策が必要になる。

③避難指示が出ても遠いため行けない。

- ・高齢者や、不自由な人は遠い距離の移動ができない。

地域独自で支えあう組織を作り対応する。しかし、個人の安全が最優先なので、救助対象者の対応には時間差が生じる。

④避難場所が遠いので避難しない。

- ・五福校区では小学校が一次避難場所になっている。

避難経路途中で中学校の2次、高等学校の3次避難所がある。水害対応の民間避難施設もあり、開放の要請を行政と十分に調整することが必要。

(2) 地区民児協として課題への取り組み方

五福新町の貴重な記録を参考に、五福民児協では委員の担当地区の特性を踏まえ高齢者の安全対策、避難対策の2点を重要課題として取り組む。

(3) 今後、取り組んでいく目標

活動を継続して、地区住人に周知し、災害発生時には支障なく行動できるようにする。

(4) 連携する機関（重要度順）

自治振興会、社会福祉協議会、各種関連団体、地区センター、小・中・高校。

(5) 実施時期等（進め方・手順等・今後の取り組み課題等）

実施工程を関連機関と調整する。

《五福校下民生児童委員協議会『活動強化方策地域版 2026～2028』》

重点目標 【地域の命を守る】

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック

神明校下民生委員児童委員協議会

(様式1)

事例項目

重点1 地域のつながり、地域力を高めるために

<事例テーマ>

自治振興会・町内会との民生委員児童委員活動の連携・協力

<概要>

(1)基本情報

神明校区は約1,800世帯・約3,900人・65歳以上約1,100人(令和7年3月末)高齢化が進み、ひとり暮らしも増えている現状

(2)活動の目的

老人会の数も減り、高齢化とともに家から出ることが少なくなり、また子ども達にも「自分の住んでいる町内を知って欲しい」という思いから世代を超えてのふれあい。

(3)活動内容

《子ども一日民生委員児童委員》

- ・ 各町内の小学6年生を中心に委員になってもらう(強制ではない)
- ・ 春休みに学童保育にてプレゼントの絵を描いてもらい加工
- ・ 各町内会長に出てもらい各公民館にて出発式を行い民生委員と回る
- ・ ひとり暮らし、高齢者世帯を事前に選んで、訪問することを伝えておく
- ・ 後日、校区回覧にて報告

(4)活動の成果

- ・ 民生児童委員の活動を知ってもらえた。
- ・ 「同じ町内に居ながらこんなおじいちゃん、おばあちゃんがいたことを知らなかった」
- ・ 「孫より小さい子と話したのは何年振り？嬉しかった」などの声が寄せられた。
- ・ 子ども達は、自分から「毎日、何をしていますか。元気の秘訣は何ですか。畑はしますか。どんな野菜を作っていますか。」などたくさん話をしてくれた。
- ・ 親からは前日の夜の会話や子どもの様子を聞き子どもの頑張りに民生委員児童委員も気づきを得る。また、親からは「子どもを囲んで家族で良い会話ができたと感謝の言葉をもらい一同喜ぶ。

(5)課題と改善点

今まで定期訪問だけだったらしく、他地区の活動を参考に今回初めての「子ども一日民生委員」

活動を行いました。

何を？どうしたら？手探り状態での発進。終わってみて来年度に向けての課題が見えた。

子どもの人数・訪問件数・訪問先の選び方の基準・所要時間など。

基準

6年生を対象にする(居ない時は5年生)

訪問先対象者は、各町内90歳以上としておられない時は各町内の高齢者。

プレゼントの作成は学童保育「のびっこ」で主任児童員が主体となって作成。仕上げは全員で。

自治振興会・町内会長との打ち合わせをしっかりとる。

役割分担をしっかりと決め責任を持つ。

(6) 今後のアクションプラン

毎年行う。(時期がずれても)

他の協議会との連携 来年度から防犯連絡協議会も参加してもらう

(7) 添付資料

昨年度の児童の訪問の様子

ひとり暮らし宅の訪問にて、会話と一緒にたくさんの笑顔をお届けしてくれました。



(様式2)

活動強化方策策定に向けて

(1) 地域で見えてきた現状と課題

空き地に戸建て住宅・アパートが建設され若い人が増えるがふれあいが無い。

一方で、ひとり暮らしの高齢者が各町内に増え、買い物も十分にできない人が増えている。

(2) 地区民児協として課題への取り組み方

- ① 高齢者を孤立させない。(現在、メンタルヘルスサポーター・保健推進委員の協力を得る)
- ② 各種団体の協力を得て、高齢者が外に出て、家に閉じこもらないように町内ごとにふれあいの集いを開催する。
- ③ 栄養面の心配のある高齢者に対して、きちんと食事ができているか聞く。

(3) 今後でも取り組んでいく目標

現在取り組んでいる活動の定着や回数増。

例えば、子ども一日民生児童委員やふれあいの集い

(4) 連携する機関

自治振興会(町内会)・保健推進委員・防犯連絡協議会・消防団・地区センター
包括支援センター・保健センター

(5) 実施時期等(進め方・手順・今後の取り組み課題)

自治振興会総会にて現状を伝え協力依頼をした。

各町内から「行ってきてほしい」「見てきてほしい」など連絡が入る様になった。

この関係を維持していく努力を民生児童委員一同「共通の思い」とする。

《神明校下民生委員児童委員協議会『活動強化方策地域版 2026～2028』》

- 1, 各町内、または隣接町内にて集いを開催出来るようにする。
- 2, 困り事が言いやすい環境にする(町内会・自治振興会などに協力依頼)
- 3, 世代を超えてふれあいが出来るようにする。(子ども一日民生・児童委員)
- 4, 包括支援センター・保健所との連絡を密にする。
- 5, 民生委員児童委員がいる「安心感」を持ってもらえるように努める。

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック
四方校下民生委員児童委員協議会

(様式1)

1 事例項目

重点1 地域のつながり、地域力を高めるために

2 事例テーマ

自治会・町内会活動と民生委員・児童委員活動との連携強化

3 概要

(1) 地域の特性

令和7年3月末の本地区の高齢者人口は1,025人で高齢化率は32.13%である。また、0から14歳の年少人口は239人で全人口の7.49%で、少子高齢化が極めて顕著な超高齢化地区である。

また、本地区の各種団体の長や組織役員が多くが自身も高齢者であり、高齢者イコール「支援される側の弱者」ではなく、多くの高齢者が地域の一員としての社会的役割を担い、人との交流を保ちながら「支援する側の推進役」として活動している。その中で、社会の一員としての自覚と人の役に立つ喜びを感じ、それを生き甲斐とすることで、自らの介護予防や認知症リスクを下げることに効果的であると考えられる。

(2) 活動の目的

【様々な情報を確実に伝え届ける】

ある賃貸集合住宅で、富山市の広報紙や地区の催し物案内等のお知らせがその全ての住人には届いていないことが分かった。日々の生活の中での課題を解決したり地域の行事に積極的に参加したり出来るように、情報が得られないことで孤立したりすることがないようにしなければならないと考え、その実情を探り、方策を検討し問題解決を図った。

(3) 活動内容：自治会との連携

当町内では、配布物等は町内会長が各班長に渡し、班長が各戸に配布することになっている。そこで町内会長に確認したところ次のことが分かった。ある集合住宅においては、住人の出入りが頻繁に行われるのでその都度空き部屋等を確認することが難しい。住宅の賃借人は入居する際に住宅会社から文書等で、外部からの配布物等は所定のポストから一部ずつ取ってほしいと伝えられていた。ところが、それをしっかり認識できていない住人が少なくないようである。そこで、町内会長と相談し、「A住宅に入居の皆様へ」のプリントを作成し、その住宅の共用のポストに富山市からの「広報とやま」や町内からの連絡等を月に2回（5日と20日前後）に入れ置くのでそれぞれ一部ずつ取って欲しい旨を町内会長の名で記し、各戸に配布した。

(4) 活動の成果

町内会長から、これまで共用ポストの中にそのまま残って廃棄した広報紙が多くあったが、文書を配布したことでほとんどの住人が共用ポストから配布物を受け取っていると聞いた。

(様式 2)

活動強化方策策定に向けて

(1) 地域で見えてきた現状と課題

少子高齢化が進み、賃貸集合住宅等に住む一人暮らし高齢者が増えている。そのような状況の中で、近所付き合いのない人や閉じこもりがちな人、人に相談出来ない人が現れてきた。

(2) 校下民児協として課題への取り組み

- ①自治振興会や各町内の情報伝達状況について確認する。
問題点があれば、他の町内の具体的方策に学び、改善を図る。
- ②各町内活動運営についての課題や困難点について話し合う場をもつことで校下全体の自治活動の活性化を図れるようにする。

(3) 今後も取り組んでいく目標

現行の活動の継続と発展できる活動

(4) 連携する機関

自治振興会・町内会・各種関連団体・地区センター・包括支援センター

(5) 実施時期等

気になる人の情報や相談が寄せられるようになり、早期発見及び対処できるようになった。

《四方校下民生委員児童委員協議会「活動強化方策地域版 2026～2028」》

重点1 地域のつながり、地域の力を高めるため

- ・自治振興会や各町内会と連携して情報伝達状況について確認する。
- ・校下全体の自治活動の活性化を図るようにする。
- ・校下内の各種団体と連携して校下の気になる人を発見し適切な支援につなげる。

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック
八幡校下民生委員児童委員協議会

(様式1)

事例テーマ

1. ぬくもり弁当配食活動の推進

八幡校下地域福祉ボランティア「ほほえみの会」との連携

2. 概要

(1) 基本情報

本地域の人口状況は2,160人(令和7年4月1日現在)内、65歳以上の高齢者人口は895人、高齢化率は41.43%になります。895人の内、38人のひとり暮らし高齢者を民生委員が見回りや安否確認のほか、月1回の第2土曜日に「ぬくもり弁当」の配食サービスを行っています。

「ぬくもり弁当」を作っているのは、校下の主婦たちのボランティアグループ「ほほえみの会」で、このグループの歴史はすでに30年以上は経っているのですが、設立された年代の記録は残されていないようです。

グループの人数は30名で(民生委員が数名加入している)、3班に分かれ、地区センター調理室で弁当を作っています。作られた弁当は民生委員がそれぞれの担当地区の一人暮らし高齢者宅へ届けています。

(2) 活動の目的

地域の方々と共に調理し、親交を深め、見守りいただいている方々の情報も聞きながら9時から11時までの調理です。

本地域の65歳以上のひとり暮らし高齢者の割合は全市と比べて低いですが年々上昇傾向です。

ひとり暮らし高齢者率の推移(各年6月1日現在) 上段は全市、下段は八幡校下。(八幡校下健康づくり推進会議資料より)

令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年
6.1%	6.2%	6.4%	6.3%	6.3%
3.5%	3.6%	3.9%	4.3%	4.4%

(3) 活動内容

「ほほえみの会」の活動は年8回、第2土曜日の9時から12時までで、11時過ぎに民生委員が弁当を受取りに行く。調理の基本共有事項は、季節感・タンパク質・カルシウム・ビタミン等を補える献立。色彩や大きさ、硬さ等への配慮、そして一番大切な衛生面での徹底した管理(食中毒・感染症等)。

炊飯が上手く出来ず慌てることや、材料の買い忘れや、調味料の不足等ハプニングの連続ですが詰め終えた後に、八幡小学校の子供達のメッセージとお絵描き熨斗を貼って出来上がりです。このお絵描き熨斗も好評です。

「ほほえみの会」の弁当作り活動内容

令和6年度給食サービスの実施報告書（配食）より

月 日	班 名	利用者数	調理者数	食材費	補助金	主なメニュー
4月13日	3班	34	8	12,086	17,000	おこわ、白エビかき揚げ 他
5月11日	1班	34	10	13,032	17,000	竹の子ご飯、肉じゃが、他
6月 8日	2班	33	7	16,424	16,500	梅わかめご飯、煮物6種、他
10月12日	3班	31	7	13,888	15,500	栗とキノコの炊き込みご飯、他
11月 9日	1班	28	9	12,313	14,000	若菜の混ぜご飯、銀鮭の焼き魚
12月14日	2班	29	7	13,645	14,500	唐もんご飯、7種の煮物、他
2月 8日	3班	28	8	10,491	14,000	梅ヒジキご飯、煮物、煮豆、他
3月 8日	1班	28	9	10,498	14,000	チラシ寿司、大根と鶏肉ゴマ煮

(4) 活動の成果

配食サービスを受けている人達からは大変好評で、「いつもおいしい弁当を届けてもらってありがとう」の感謝の声を届けていただいています。

(5) 今後の課題

- 増え続ける希望者への対応。
- 限られた予算での内容の充実。
- 作り手の高齢化。
- 調理室スペースの限界（調理施設・器具等）

(6) 今後のアクションプラン

- 若い作り手の確保のためのPR活動の強化。（自治会の協力が必要）
- 近年の物価高に対する食材確保の練り直し。（農家からの仕入れ）
- 食中毒防止の観点から体調管理など安全面の確認の強化と徹底（空気清浄機等）

(7) 添付資料



ほほえみの会の皆さんの弁当作り



作っている場所は
八幡地区センター調理室



民生委員が弁当をお届け

(様式2)

活動強化方策策定に向けて

(1) 地域で見えてきた現状と課題

本地域の高齢化率は41.43%になります。防災や防火活動に支障が出てきつつありますが、各町内会役員は1年から2年で交代しているため現状把握に忙殺されていて細部にまで気が回らないでいるように思われる。

又、能登半島地震の時に要支援者宅へ、近所の人と一緒に避難するよう、声を掛けてくれたのに、これを断った要支援者のいた事例がありました。

避難行動に際して要支援者の意識に課題が見えたことと、防火活動にも高齢化が進んでいるのに従来のまま、漫然と続けている事にも課題が見えます。

(2) 地区民児協として課題への取り組み方

課題が見えた一部の町内会と長寿会に年1回の防災と防火の研修会開催を提案し、校下社会福祉協議会にも協力をお願いして、最低年1回、出来れば2回～3回継続した研修会にしたい。

その上で校下全体に広げていけたらと考えている。

(3) 今後、取り組んでいく目標

地域の人達に民生委員児童委員を身近に感じていただいて、「気になる人」の情報や相談が多く寄せられるようにしたい。

地域共生社会に少しでも近づけるための防災、防火の研修会になればいいと思う。

(4) 連携する機関（重要度順）

- ・校下自治振興会（町内会）
- ・校下社会福祉協議会（長寿会）
- ・消防団
- ・地区センター

(5) 実施時期等（進め方・手順等・今後の取り組み課題等）

- ・地域共生社会の実現は大変難しい課題なので少しずつ進めていくしかない。
- ・コペルニクスの展開が必要。

《八幡校下民生委員児童委員協議会『活動強化方策地域版2026～2028』》

校下、各町内の公民館の住所地の海拔（標高）や洪水、津波ハザードマップをもとにした数値を表にして示しての防災講習会や避難時意識改革の講習会を開けたら良いと考えている。

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック

草島校下民生委員児童委員協議会

(様式1)

重点1 地域のつながり、地域力を高めるために

(【事例4】能登半島地震の住民・委員アンケート)

テーマ：能登半島地震の地域・民児協アンケートから見えた課題及び対策

(1) 地域の特性：海岸から約1キロ～2キロと海岸に近く、神通川左岸直下に位置する。

また海拔は平均で約2m、河川敷の地形です。

(2) 地震発生時：

① 能登半島地震発生時(午後4時10分)の様子

・立ってられない揺れで、物に捕まり揺れの収まるのを待った。

② 住民の避難状況や安否確認の様子

・指定避難場所の小学校に避難・自家用車等を使って高台方向にそれぞれが避難

・できる範囲で住民同士声掛けしながら避難した。

・声掛けした人は、親族、近隣住民、町内役員、民生委員の順でした。

・落ち着いてから、できる範囲で安否確認(当日は人的被害無し)

③ 地域住民の様子：避難場所は地域住民それぞれで避難していた。

(3) 地震発生以降の活動

① 令和6年1月2日以降

・気がかりな、担当地区の一人暮らし高齢者や高齢者のみを中心に確認に回った。

・住民の安否確認に住民の協力を得て回った。(人的被害無し)

② 委員として活動した内容

・地区民児協委員と連絡を取り合いながら自治会・地区センターと情報の共有をした。

③ 地域の様子

・人的被害・建物等のインフラに大きな被害は無し。

・耕作地の液状化と道路の亀裂が発生し通行不可の道路複数箇所有り。

④ 地震から1週間経過した中で特筆すること

・今回は約80cm津波の発生で直接の被害は無かったが、豪雨災害のほか、今後は呉羽山断層地震対策と津波対策の必要性を感じた。

⑤ 災害時民生委員として感じた事

- ・災害時あらゆる場面で1人でできることは少なく居合わせた人との協力と連携が欠かせず、協力体制整備の必要性を強く感じた。

⑥ 今回の地震で感じた課題

- ・自治会が中心となり、災害時の住民それぞれの行動の検討が必要と感じた。また、日頃の隣り近所との付き合いの大切さを痛感した。

能登半島地震における地域住民へのアンケート（草島）校下・地区・ブロック民生委員児童委員協議会（集計表①）

『R6民生児童委員の日活動強化週間取組』及び『R6地域連携資料』

問	設問の内容	人数合計	内 容	人数	内 容	人数
1	性別	45	①男性	18	②女性	27
2	年齢	45	①19歳以下		②20～29歳	
			③30～39歳		④40～49歳	
			⑤50～59歳		⑥60～69歳	3
			⑦70～79歳	19	⑧80～89歳	21
			⑨90歳以上	2		
3	世帯状況	43	①ひとり暮らし世帯	30	②高齢者世帯	9
			③障がい者世帯	3	④ひとり親世帯	
			⑤その他(孫・親族)	1		
4	震災時、誰かに声をかけられましたか	43	はい	43		
			①親族	16	②近隣住民	17
			③町内会役員	6	④民生委員	3
			⑤その他(友人・知人)	1		
			いいえ	6		
5	震災時に避難しましたか	30	①避難した	30		
			②避難しなかった	12		
6	避難しなかった理由	12	①避難場所を知らなかった	3	②避難する必要がないと思った	6
			③避難したくてもできなかった	3	④その他	
総回答人数合計		273				
7	震災時に感じたことや困ったことはどんなことですか（記入ください） 裏もお使いください		①TV情報で動く危険と判断②初詣中ベットの心配で戻るといったが娘に止められた③渋滞のため2階へ避難④避難できず自宅で死んでも良いと思った⑤猫をおいて避難できない(迷惑になるといった)餌の心配もある⑥行くところが無い⑦小学校へ避難⑧渋滞で動けなかった⑨車で避難したが避難場所がわからなかった⑩避難場所がわからなかった⑪避難場所が不便⑫友人宅⑬子供の家			

能登半島地震における地域住民へのアンケート（草島）校下・地区・ブロック民生委員児童委員協議会（集計表②）

『R6民生児童委員の日活動強化週間取組』及び『R6地域連携資料』

問	設問の内容	人数合計	内 容	人数	内 容	人数
1	当日単位民児協で連絡を取りましたか	6	① はい	6		
			② いいえ			
2	単位民児協構成員数	6	民生委員児童委員・主任児童委員	6		
3	単位民児協の活動内容		当日		翌日	
			① 委員の安全確認	○	① 委員の安全確認	○
			② 地域の状況把握		② 地域の状況把握	○
			③ 要配慮者の確認		③ 要配慮者の確認	○
4	災害時の単位民児協に安否確認の手順がありますか		はい 特記事項（あれば記入）		いいえ	○
			①津波被害なし②家屋に目立った被害なし③水田に液状化現象が認められた④後日小学校の引き込み電線が切れ一部地区停電⑤道路に亀裂が入った			
5	地域の状況把握	6	① 地域の状況把握の日数	4	② 要配慮者状況把握の日数	2
6	委員は震災時避難しましたか	6	① 避難した	4	② 避難しなかった	2
7	避難しなかった理由		① 避難場所を知らなかった	0	② 避難したくも出来なかった	0
			③ 避難の必要が無いと思った	2	④ その他	
			①TVの情報を確認し夜間の見守り活動を翌日早朝からとした②その場で安全を確認できた委員は待機していた③指定避難場所へ行ける委員は駆けつけた④1月1日午後			
			4:10の災害のため地元にはいない委員はその場で待機して身の安全を確保した			
人数総合計		6				

（草島地区の①住民(要配慮者)への聞き取り・②地区民生委員へのアンケート）

(様式2)

活動強化方策策定に向けて

(民生・児童委員制度を守り、発展させていく為に)

テーマ：単位民児協の機能強化による民生委員・児童委員への支援

(1) 地域で見えてきた現状と課題 (民生委員・児童委員、地区役員のなり手不足)

(2) 地区民児協として課題への取り組み方 (新人委員が活動しやすい助言と援助を行う)

- ・地域貢献：地域貢献を意識し、成長と学びの姿勢を大切にする。
- ・成長と学び：活動を通じて学びながら、自分も少しずつ成長する様に活動する。
- ・ポジティブな姿勢：苦勞を楽しさに変え、生き甲斐を感じられる活動へとつなげる。

(3) 今後取り組んでいく目標 (活動目標)

- ・地域に感謝を持ち、心身を向上させる事を目指す。
- ・活動を通じて感謝でき、自身も成長続ける。
- ・苦勞を楽しさに変え、生き甲斐に転換できる活動を目指す。

実践方法：① 対象者の立場に立ち、適切な距離感を保つ。

② 日常的な声掛けを通じて、支援が必要な方を明確にする。

③ 多角的な視点で観察し、主観を避ける。

活動目標：① 地域に感謝の気持ちを持ち、心身の向上を図り貢献する。

② 苦勞を楽しさや生き甲斐に変えて取り組む。

(4) 連携する機関 (地域住民、自治会、包括支援センター、各種団体と協力する)

(5) 実施時期 (進め方・手順等・今後の取り組み課題等)

《協力とネットワーク》：多くの人と協力し、各自特技を活かして負担を分散。

① 地域住民や役員、団体の支援を得る。

② 軽い接触を通じて、感受性を磨き、喜びを感じる体験を増やす。

③ 自治会や関連組織と連携して、情報の収集・伝達を強化。

《活動の充実》：地域イベント(お祭り、納涼祭、草刈り、クリスマス会など)を活用。

《情報収集》：民生児童委員の体験や情報を参考に、ネットワークを構築する。

《自発的な計画》：自発的なイベント計画を実施する。

《公共機関の利用》：公共機関や教育会の情報を活用する。

《草島校下民生児童委員協議会『活動強化方策地域版 2026～2028』》

* 単位民児協の機能強化と、民生委員が目標を持って充実した活動ができることを目指す。

* 各委員が感じる、活動上の悩み、困りごとなど相談できる環境を整備してゆく。

「一隅を照らす」 活動事例

西地区ブロック
倉垣校下民生委員児童委員協議会

(様式1)

事例事項

地域のつながり、地域力を高めるために

〈ポイント〉

住民が課題を抱え、孤立してしまうことを防ぐ「予防の視点」の取り組みを重視していく

事例テーマ

自治会・町内会活動と民生委員・児童委員活動との連携強化

概要

(1) 基本情報

各町内で実施していた子どもから高齢者まで一堂に会する世代間交流を目的とした“ふれあいサロン”が新型コロナウイルス禍により休止状態になった。

同様に、親睦を深める町内の納涼祭や新年会なども中止となり住民同士のふれあいの機会も少なくなった。

(2) 活動の目的

校下自治振興会・社会福祉協議会・民生委員を中心に、まずは“ふれあいサロン”の再開と参加を呼びかけ、町内の活性化を取り戻す。

(3) 活動内容

“ふれあいサロン”を実施する町内は事前に地区センターを通して企画書を提出し、実施後は報告書を提出することで費用補助(一律3万円)を社会福祉協議会から受ける。

(4) 活動の成果

令和6年度は、校下8町内のうち4町内で実施できた。

(5) 課題と改善点

- ・高齢者への参加要請が足りなかった。
- ・町内会長とのコンタクトを密にし、次回の開催に備える。

(6) 今後のアクションプラン

校下全町内での実施を目指す。

(7) 添付資料

ふれあいサロンの風景



ふれあいサロン 報告書

町内名	布目東町	場所	東町公民館
開催日	令和6年11月17日(日)	時間	11:00~16:00(5時間)
参加人数	40人		

(写真)



(様式2)

活動強化方策策定に向けて

(1) 地域で見えてきた現状と課題

- ・倉垣校下(8町内)の高齢化率が2極化
50%超 4町内
30%台 3町内
3%台 1町内(約20年前に分譲された新町内)
倉垣平均高齢化率 33%
- ・高齢化により老人会の運営が困難のため解散した町内もある
- ・コロナ禍で校下や町内の行事が休止あるいは縮小
- ・小学生がひとりもない町内もあり、ますます高齢化

(2) 地区民児協として課題への取り組み方

- ・自治振興会や社会福祉協議会、町内会長と連絡を密にし、各種行事への参加を働きかける

(3) 今後、取り組んでいく目標

- ・“ふれあいサロン”への参加を担当区域の高齢者へ積極的に呼びかける

(4) 連携する機関(重要度順)

社会福祉協議会・自治振興会・地区センター・町内会長

(5) 実施時期等(進め方・手順等・今後の取り組み課題等)

各行事やイベント毎に検討

《倉垣校下民生委員児童委員協議会『活動強化方策地域版2026~2028』》

倉垣校下の人口構成比からして今後ますます高齢化率が高くなるので高齢者への訪問活動をより強化する。

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック
呉羽地区民生委員児童委員協議会

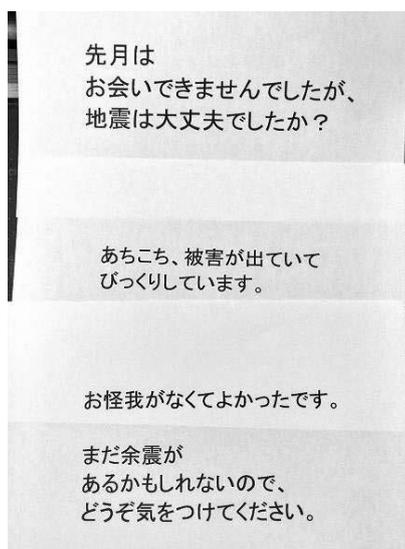
(様式1)

事例2 さまざまな課題を抱えた人びとをささえるために

テーマ:生活機能に衰えのあるお年寄りが孤立感、疎外感を抱かない工夫とその汎用化

1:聴覚障害のあるお年寄りとのコミュニケーションの工夫

- (1)定期的に訪問している高齢者の中に、聴覚に障害のある方がいます。こちらの話は聞こえないので、毎回あらかじめ想定される会話のパターンを予測してプリントアウトし、適宜お見せすることで会話を広げやすくする工夫をしています。
- (2)季節の話題などバリエーションをもたせるなど、「ふつうの会話」感を出すようにしています。
- (3)お留守のときは返信用のハガキとともに訪問カードをポストにいれています。



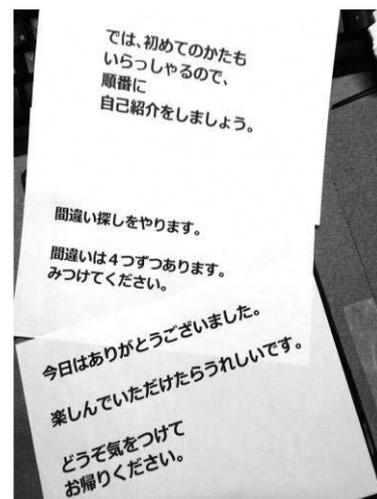
2:「聞こえにくい」お年寄りへの対応の汎用化

- (1)呉羽地区では高齢者向けの、食事とレクリエーションのイベントを毎年2~3回実施しておりますが、聴覚障害の方が参加するときは、あいさつ内容やゲームの説明などをプリン

トしてお渡しすることで、疎外感を感じることがないように工夫しています。

(2)これらのプリントをテーブルに置いておくと、耳が聞こえていないはずの他の参加者の方も、それを手にとってお読みになることがよくあります。

(3)年齢とともに聴覚は衰えていくので、ふだんは普通に会話をしているようでも、「なんとなく聞こえにくい」という、軽度の「困り感」はあるのだと感じます。文字でのフォローは「聞こえている」相手にも有効なのです。

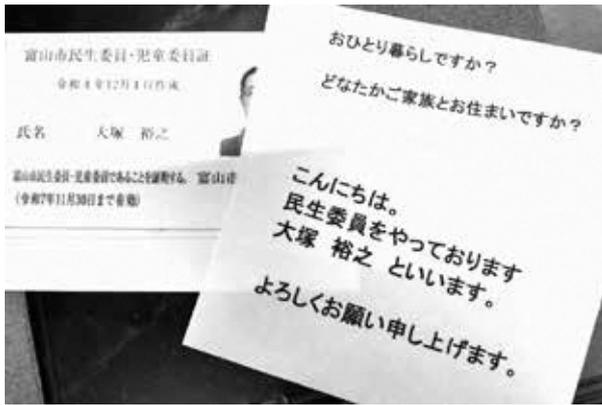


3:全般的な機能の衰えによる「困り感」を、最小限にできるような工夫

(1)一人暮らし高齢者のリストに基づいて新規に訪問するときも、耳が遠い方との意思疎通に悩むことがあります。

ふだんの生活は大丈夫でも、「知らない人から」「予測できない内容で」話しかけられると、内容を把握できないというケースです。

警戒されてしまい、聞き取りがうまくできないなどの不都合が生じがちです。



(2) この場合も、訪問の要件をプリントしたものをお見せすることでコミュニケーションがスムーズに進みました。

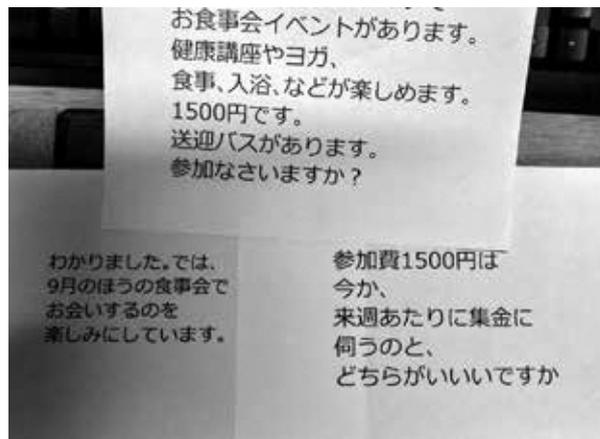
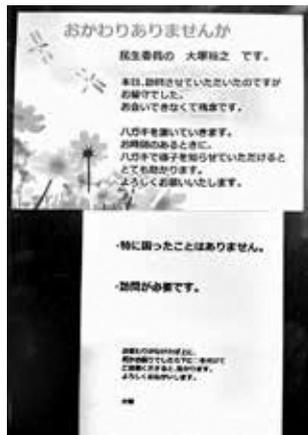
複数の会話パターンを想定した会話カードを用意しておくことで、無理のない会話が可能になりました。

(3) また、目が見えにくい方も多いので、自分は民生委員の身分証明書を拡大コピーしたものを持ち歩いています。

(4) 見えにくい方については、イベントなどの案内のプリントも読みにくいようです。大きめの文字で要点を書き出したものを添付すると、どなたにも喜ばれます。

足が悪く、玄関まで出て来にくい方の訪問時には、あらかじめ用意した訪問カードをポストに入れておき、都合のいいときに電話をいただくなどの工夫をしています。

(5) このように視覚や聴覚が衰えがちな高齢者の方については、会話内容をあらかじめプリントしたものや、文字や写真を拡大したものが、困り感や疎外感を解消するのに有効なコミュニケーションツールであると考えます。



4：ノウハウの汎用的展開と問題点

(1) 自分の担当エリアには、たまたま「まったく聞こえない」方がいらっしゃいますが、「聞こえにくい」「見えにくい」高齢者の方は、どの地域にもいると思います。

筆談カード等を民生委員間で共有することで、より多くの高齢者が、気軽に民生委員と交流するための手助けになるのではないかと思います。

(2) これらはパソコンとプリンターがなくては作りにくいという欠点があります。

使いやすい会話の定型文をいくつか作り、必要に応じてカードを共有していきたいと考えていますが、カードの管理自体が負担になる可能性もあります。

スマートフォンやノートパソコンの併用など、高齢者も見やすく、民生委員も使いやすいツールを工夫していくのが課題であると考えます。

(様式2)

活動強化方策策定に向けて

(1) 地域で見えてきた現状と課題

表面的には問題なく暮らしているように見える高齢者であっても、「見えにくい」「聞こえにくい」などの軽度の「困り感」を抱えている例は多い。より、寄り添った対応が望まれる。

(2) 地区民児協として課題への取り組み方

会話カードの利用や大きい文字のプリントの使用などで、コミュニケーションに安定感、安心感を付加して行こうと考えている。

(3) 今後、取り組んでいく目標

今はまだ委員個々の思いつきや工夫程度の段階である。データやノウハウを共有し、より完成度の高いツールを開発して行くことを目指す。

(4) 連携する機関（重要度順）

- ・ 包括支援センター、町内会（自治会）、地区センター、各種関連団体

(5) 実施時期等（進め方・手順等・今後の取り組み課題等）

民生委員の会合等で、適宜話し合いつつ進めていきたい。

《呉羽地区民生委員児童委員協議会『活動強化方策地域版2026～2028』》

さまざまな課題を抱えた人びとをささえる

- ① 困りごとを持つ高齢者等に寄り添い、その実態把握を行う。
- ② コミュニケーションを図るため、必要に応じて実効性のあるツールを開発し、共有化する。
- ③ 連携する機関との情報交換を密にし、最善の対応ができる様に努める。

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック
長岡地区民生委員児童委員協議会

(様式1)

事例2 さまざまな課題を抱えた人々をささえるために

<ポイント>

これまで以上に地域住民とのネットワークを構築し、地域の「気になる人」を早期に発見し適切な支援につなげること、及び地域の特性をも活かした新たな支援・サービス想像への提言・提案等を進めていく。

事例テーマ

積極的な訪問活動を通じた住民との関係づくりの推進

1. 孤立している高齢者への対応

(1) 適切な治療を行わず、運動もしていない高齢者への対応

梅雨時期、足にむくみが見られた10数人のひとり暮らし高齢者。内1名が、紫色に変色した足の甲を見せながら痛いと訴えるため、県外居住の長女に「かかりつけ医へ民生委員に連れて行ってもらうからと診察予約をするように」と連絡し、診察を受けたところ、「投薬はしません。ふくらはぎのポンプ機能が低下しているから。運動をすれば治ります」との説明と、椅子に座ったまま行う“かかと落とし”等の運動の指導を受けた。むくみが見られた全員に、改善しなければ医師の診察を受けることを前提に指導内容を伝えたところ、全員の腫れが2~3週間で改善された。

(2) 「高齢福祉推進員」を選べないひとり暮らし高齢者への対応

「高齢福祉推進員」を選定できない高齢者に悩んでいたところ「久しぶりに喋った、この半年で話したのは、町内会費の集金にこられた方とあなただけ」の言葉に異常を感じ、ひとり暮らしの方全員に「半年間で町内の方と何人話した?」と尋ねる。「近所の人とは会釈はするが、話しはしない」「怪我や病気の時、救急車は恥ずかしいからタクシーを呼ぶ」との言葉が多数だった。

※ 定例会で、高齢者が信頼できる方を3人位尋ね、その方たちの中から打診して引き受けてもらうことが良いのではないかなど方法を話し合った。結果として、「高齢福祉推進員」の選定は進み、近隣者との言葉のかけあいが増え、気持ちのなごみが深まってきている。

※ 好事例として、能登半島地震の際、県外旅行中の推進員が息子さんに様子を見てくるように指示。一緒に連れ立って避難行動をとった推進員も数名います。

2. 「ゴミ屋敷」に住む高齢者への対応

(1) かたくなに閉ざしている人の心を溶かすことは容易ではありません。いつしかお互いさまと言い合える気持ちで臨むことが大切だと思います。

20年来のゴミ屋敷。ゴミの話題を出したのは初回の訪問時のみ。月に5~6回訪問時の話題は健康と日々の生活のみ。訪問すること6ヶ月目。突然「ゴミを片付けたい最初に何をしようか?」と尋ねるので、「ゴミ袋を買ってこられるよね?!」と100枚のゴミ袋を買ってきたことを始め、ゴミ袋にゴミを入れてゴミステーションまで持って行く。前向きな気持ちが感じられた勢いの中で、近所の人にも応援を受け3人で

庭のゴミ全部で約 250 袋。加えて落ち葉で近隣に迷惑をかけていた 15 本の木の伐採もして、見違える住宅に変わった。

(2) 難聴の持病を持つ、50 歳代のひとり暮らし女性にも、近隣者の見守りと説得行動を重ねて、ゴミ屋敷の改善をみている。

3. ひとり暮らし高齢者の笑顔を引き出すメッセージカード

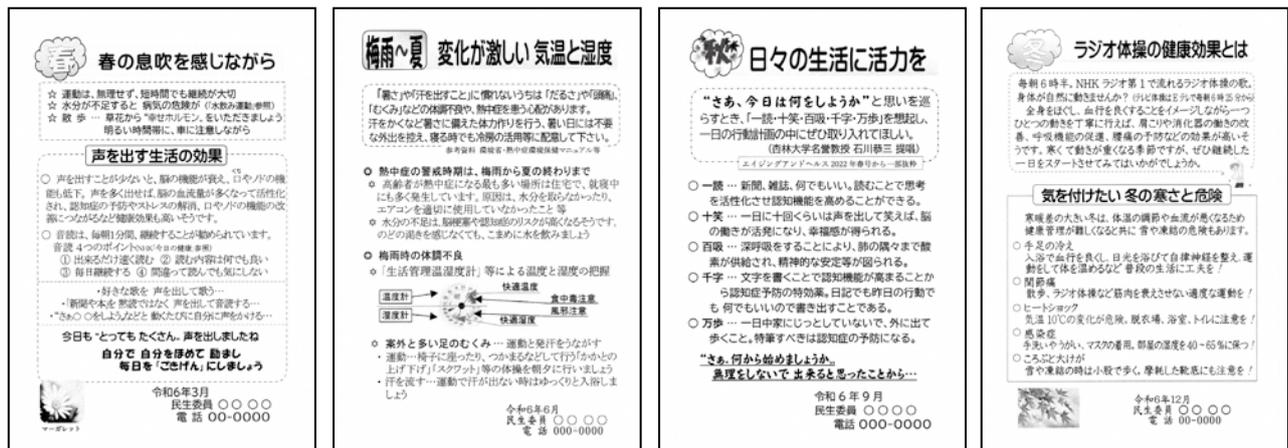
(1) 定例会での検討

「訪問活動の難しさは、話題に窮したときどのように対応すればよいのか」ということを課題にして話し合いをした。

その際、活動事例集「一隅を照らす」からメッセージカードというヒントを得るとともに、メッセージカードの配布方法・内容について検討した結果、

- ・ 日常の過ごし方や健康管理の方法等日々の暮らしの中で実践できる内容
- ・ 原則として四半期に 1 回の発行。必要の都度に臨時号も発行する等、立案や作成、配布を全員の協力で取り組むこととした。

(2) 結果として、メッセージカードに記載した季節の話題や健康への気配りに話しが弾むなど、「訪問したことを喜んでもらい、次の訪問を楽しみに待ってもらおう」といった心の通い合える関係づくりに努めている。



4. 社会参加により、お互いさまと言い合える仲間作り

(1) 個人を対象とした訪問活動

介護度が高く、容易に外出できない数人に対し、高齢者福祉推進員や近隣者の協力を得て 3 ヶ月に 1 度実施するにこぎ着けた。

(2) 集団を対象とした集いの結成

「心の和」と「一体感を持つネットの輪」を保ち、「無理のない、楽しい、張りのある集いであること」を課題として、参加者を募ってサークルを結成し、「話し合い」、「体操」、「唱歌・童謡 2 曲を歌う」をメニューとする活動を実施している。

【今後の取り組み】

地域力を高めていくためには、仲間としての交流を行い、お互いを見守る力を高めなければとの思いを強くしている。

(様式2)

活動強化方策策定に向けて

(1) 地域で見えてきた現状と課題

- ・ひとり暮らし高齢者や高齢者のみの世帯が増えてきている。
- ・閉じこもりや近所づきあいが無い高齢者が見られるようになった。
- ・行政機関、町内会、近隣住民との関わり的重要性。

(2) 地区民児協として課題への取り組み方

- ・支援を必要とする人の把握に努める。
- ・ケアネット活動を通して地域力を高めるために、町内会や地区社協に更なる働きかけをする。

(3) 今後、取り組んでいく目標

- ・ケアネット活動の広がりを始めとして、誰もが集える場のサロンを目指したい。

(4) 連携する機関（重要度順）

- ・自治振興会（町内会）、地区社会福祉協議会、地区民生委員児童委員協議会、百塚包括支援センター

(5) 実施時期等（進め方・手順等・今後の取り組み方課題等）

- ・高齢社会に生じる現状の把握に努め、無理なく出来る事から進めていく。
- ・関係団体と連携して進めていく。

《長岡地区民生委員児童委員協議会『活動強化方策地域版 2026～2028』》

さまざまな課題を抱えた人びとをささえるために

- ① 訪問活動や集団活動（サークル）を通して住民との「心の和」づくりにつとめる。
- ② 関係団体の理解を得てケアネット活動を推進し、住民の「和」と「輪」で地域力を高めていく。

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック
寒江校下民生委員児童委員協議会

(様式1)

1. 事例項目

重点 地域のつながり、地域力を高めるために

<ポイント>

地域の皆さんに積極的に活動をPRする。

2. 事例テーマ

(1) 子育てを応援する地域づくり

地区の保育所でシルバーサポートの方と一緒に保育所の草むしり、清掃、雑巾作りを実施。

(2) 給食ボランティアとの連携

給食ボランティアと共に一人暮らしの家に弁当を配達しながら、声掛け、見守りをする。

(3) 社会福祉協議会との連携

「寒江歩こう会」による健康チェックと高齢者への参加推進。

3. 活動の成果

子供たちや高齢者の方々との交流を深めた。

4. 課題

少子高齢化が進むなかで、すべての方への対応が難しくなっている。

5. 今後のアクションプラン

連携する機関（自治会、社会福祉協議会、各種団体、包括支援センター等）と連絡を密にし、安心して暮らせる地域づくりに努める。

お弁当作り



寒江歩こう会



(様式2)

活動強化方策策定に向けて

(1) 地域で見えてきた現状と課題

高齢化率の増加への対処。障害のある人に対する理解を地域で深める。

(2) 地域民児協として課題への取り組み方

委員同士で問題、課題共有。ケアネット活動の維持。

(3) 今後、取り組んでいく目標

地域内の人たち全員とのつながりの強化、各機関との連携強化。

(4) 連携する機関（重要度順）

自治振興会、社会福祉協議会、長寿会、包括支援センター、地区センター、保育所、小学校、中学校。

(5) 実施時期等（進め方・手順・今後の取り組み課題等）

包括支援センターの方々と連携を密に取り合い、現状を把握する。

《寒江校下民生委員児童委員協議会『活動強化方策地域版 2026～2028』》

重点 1. 地域をつながり、地域の力を高めるために

※ 地域内の各種団体と連携強化。支援を必要とする人の早期発見。

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック
古沢地区民生委員児童委員協議会

(様式1)

重点3 民生委員・児童委員制度を守り、発展させていくために

〈ポイント〉 単位民児協による主任児童委員支援

1. 現状

当地域では地域推薦や当番制ではなく民生委員・児童委員のなり手がいない現状で、現に私も地域の自治会長に頼まれて民生委員・児童委員とはどんなことをするのかも詳細を知らず受けてしまい今にいたっています。

当地域は4名の民生委員・児童委員がいるのですが、そのなかから主任児童委員として私が選ばれて、どんな事をするのか？1から教えてもらいながら活動しています。保育園や小学校の先生方々と話しをして、子供達の現状を教えてもらうのですが、最初の1年目は手探り状態でとても大変でした。

私の場合は2年目ぐらいに学童保育指導員になれたので、学校の様子や子供達の様子が分かる様になり、少しずつですが主任児童委員をやっていると思っています。

研修会や会議など平日の日中ばかりで、予定があったり仕事をしていると休めない事もあるので参加出来ない事があります。

2. 取り組み方

民生委員・児童委員（主任児童委員）という役員がある事も知らない人が多いので、認識される事も大切

町内会や長寿会などの開催するイベントに参加して認識してもらう様にする。

3. 今後の取り組んでいく目標

定例会では独り暮らしの事やお年寄りの方々の話が大半なので、主任児童委員の話や研修会での話しを民生児童委員全員に情報共有をしたいと思います。

これからも現行の活動をしていきますが、小学校統廃合により3年後には廃校となることから、普段の子供の見守りの有り方を町内全体で吟味することが大切になります。そのためには、自治振興会・小学校を含め検討していかなければならない。

4. 連携する機関

小学校・保育園・行政・自治振興会・各種団体（社会福祉協議会、長寿会 etc.）

5. 実施時期等

子ども達の安全を地域で見守り活動

学童保育指導員としては、いろいろなイベント（七夕まつり・クリスマス・卒業生を送る会など）のお手伝いをしていきます。

6. まとめ

民生委員・児童委員（主任児童委員）になって、地域の方々に認識されていないので「何をしているの？」と聞かれない様に発信したいと思います。

学童保育指導員にならないと学校や子供達の様子がわからない事など、たくさんある事がわかり勉強になりました。

主任児童委員になり、自分自身のためになることが多くあることがわかりました。

(様式 2)

活動強化方策策定に向けて

(1) 地域で見えてきた現状と課題

民生委員児童委員の活動は任されているが、地域の行事の決め事には民児協としての発言の場がない。

地区センター、自治振興会も民児協の活動内容を充分理解していない。

特に、自治振興会もメンバーは“あて職”的な考え方であり、任期も短期であるため、民児協の活動内容を深く認知、浸透できていない。

(2) 地区民児協として課題への取り組み方

(3) 今後、取り組んでいく目標

自治振興会もメンバーの“あて職”的な考え方をあらためるか、自治振興会以外の方に委任し長期に活動してもらう。例えば、社会福祉協議会会長等。

(4) 連携する機関

自治会、包括支援センター、自治振興会、自主防災会、地区センター、小学校、保育所

(5) 実施時期等（進め方・手順・今後の取り組み課題等）

“あて職”的な考え方をあらためる時期としては、次回（1年後？）自治会長の交代時期。

ただ、民生委員と同様、成りて・受けてくれる人がいないので、この活動は最終的に自分自身のためになることを、経験者として語り、働きかける。

《古沢地区民生委員児童委員の協議会『活動強化方策地域版 2026～2028』》

地域のつながり、地域力を高めるために

- ・地域の各種団体と連携して、民生委員児童委員の活動を高齢者だけでなく、地域全体により認知させる。
- ・自主防災組織との個人情報の共有化の検討。

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック

老田校下民生委員児童委員協議会

(様式1)

重点1 地域のつながり、地域力を高めるために

重点2 さまざまな課題を抱えた人びとをささえるために

<ポイント>

住民が課題を抱え、孤立してしまうことを防ぐ「予防の視点」の取り組みを重視していく。既存の支援制度だけでは解決困難な問題も少なくないことから、地域の特性をも活かした新たな支援・サービス創造への提言・提案を進めていく。

<事例テーマ>

一人暮らし高齢者を支援する地域づくりの推進

「給食ボランティア」への主体的取り組み

<概要>

(取り組みの現状・継続)

以前から「いきいきクラブ事業」の一環として、担当地区の民生委員及び4地区のボランティアや地区社会福祉協議会・地区センターの協力を得て、月1回(8月を除く)の手作り給食弁当を地区内の食材を中心に調理のうえ、メニュー表、簡単なお知らせを付けて、一人暮らし高齢者で食事をとっているかどうか気懸かりな人や栄養面の不安な人に、本人の申し出を受けて、毎月、担当民生委員が受給者の自宅を訪問のうえ、相対で配食を行ってきた(令和7年4月現在13食を配食)。

この間、新型コロナウイルス感染の拡大から、地区センターの調理室のクローズなどで、一時期、外注業者による弁当の配食を行ったものの、配食受給者から「やはり心のこもった手作り給食弁当が懐かしく、外食弁当は味気ない」との声や作り手の給食ボランティアの高齢化に伴う人員不足などから同事業の継続が難しい状況に至った。もっとも、新型コロナウイルス感染の落ち着きや給食ボランティアの方々の「受給している皆さんの有り難うの言葉・配食時のうれしそうな笑顔」への強い思いもあり、地区社会福祉協議会、校下民児協、給食ボランティアメンバーで検討の結果、本事業の継続を維持している。

(目的)

手作り給食弁当の配食時に、対面で言葉を交わして挨拶し、手作り給食弁当を手渡すことによって、一人暮らし高齢者の安否を確認することの大切さを改めて考え、引きこもりの解消、地域との繋がりを確保していくため。

（活動・効果）

校下民児協の民生委員児童委員（6名）は、地区社会福祉協議会の理事、評議員として参画している。令和3・4年度は、どこの地区でもそうであったように、地区自治振興会、地区社会福祉協議会、地区ふるさとづくり推進協議会等の主催の諸行事が行われず、地域の福祉活動がほとんど中止となった。そうした中、一人暮らし高齢者で体調を崩し入院を余儀なくされたほか、人との関わりの機会が減少したことで社会的孤立を背景とする様々な課題が浮き彫りになったことから、少しでも孤立化を防ぐ手立てとして、新型コロナの感染対策を十分に行って、給食ボランティアによる手作り給食弁当を調理し、細々とではあるが、この活動を続けていくことの意義を感じている。

（今後の課題）

この活動は、ありふれた日常の近所付き合いを通して、高齢者の孤独感の解消と栄養改善を行い、家庭的雰囲気と地域社会との交流を深め、もって高齢者福祉の増進を図っていくことの一助や安心して暮らせる地域を目指し地域共生社会の実現に向けて取り組んでいる。

民生委員、給食ボランティアの方々が衛生面や献立に工夫を凝らして、みんなで楽しく調理し、バランスの取れた手作り給食弁当を配っていきたいと努力はしているが、ボランティアのなりて不足は否めないところで、なり手となる人材の発掘が肝要。

これからもこの事業を継続するために、地区社会福祉協議会など関連団体等との連携を保ちながら新たなボランティアを養成し、ボランティア同志の連携を図ることで地域共生社会の見守りと地域の繋がりを図っていききたい。

調理風景



手作り給食弁当



当日献立表

おしながき	一、高菜ご飯
	一、鶏もも肉のあんかけ
	一、煮物
	一、きやらぶき
	一、カニカマ入り玉子焼き
	一、きゅうりのビール漬
一、フルーツ 西瓜	
おしながき	

香田校下給食サービスボランティアグループ
担当地区：瀬海寺野々上

(様式2)

活動強化方策策定に向けて

(1) 地域で見えてきた現状と課題

様々な課題のある高齢者（身体的な病気・怪我、認知症）、知的・発達障がい者、精神障がい者などの見守り訪問活動を実施。この間、知的・発達障がい者や精神的疾患者の現状把握が難しい。

「安心して暮らせる地域」を目指し地域共生社会の構築が急務。

(2) 校下民児協として課題への取り組み方

住民が問題を抱え、孤立してしまうことを防ぎ、みんなで支え合い暮らし続けられる地域を目指して、地域の気になる人を早期に発見し、適切な支援に繋げていく。

定例会時等における、担当地区での問題・課題等のより充実した情報共有に努める。

(3) 今後・取り組んでいく目標

援助を必要とする人へは、本人の意思を尊重し、環境の変化や拒否感を与えない支援。義務的な活動から一歩進めた形で、自主的な福祉活動を更に進めていく。

認知症高齢者、身体・知的障がい者の家族への積極的な声掛けを推進していく。

(4) 連携する機関（重要度順）

老田地区自治振興会、老田地区社会福祉協議会、呉羽地域包括支援センター、町内会、各種関連団体

(5) 実施時期等（進め方・手順等・今後の取り組み課題等）

訪問活動により現状の把握をする。

民生児童委員、関係住民の「地域共生社会の実現」への理解を高める。

連携する重要各種団体との勉強会や交流研修会の実施。

《老田校下民生児童委員協議会『活動強化方策地域版 2026～2028』》

重点2 さまざまな課題を抱えた人びとをささえる

積極的な訪問活動を通して地域住民等との関係づくりを推進

- ① 関係団体と協働し、地域の現状と実情の把握を推進する。
- ② 地域住民の生活課題に向き合い、幅広く相談支援を推進する。
- ③ 災害の発生時は、地域住民が声を掛け合って避難出来るよう実践する。

「一隅を照らす」活動事例

西地区ブロック
池多地区民生委員児童委員協議会

(様式1)

(事例1)

地域のつながり、地域力を高めるために

1) 現状

私たちの池多地区は、富山市南西部に位置し、富山西インター近傍ではあるものの、人口944人の静かな集落です。前回の「一隅を照らす」で活動事例を発表した令和4年より、人口は65人少なくなり、高齢化率も37.1%と年々高くなっております。地区の池多小学校も、全校児童が47名となり複式学級があたりまえで、3年後をめどに統廃合の話が進んでおり、ますます人口減少が懸念されます。団塊の世代が齢を重ねる中で、更に高齢化が進むとみております。

2) 取り組んでいること

池多社会福祉協議会において、民生委員も役員として活動し、各種事業に全面的に協力しております。なお、同協議会は、各町内会長、団体長などが、会長や理事として奉仕しているものですが、民生委員として高齢者の声かけや見守り、デイサービスなどの情報収集など、年間を通して活動しています。例えば、6月には地区内の80歳以上の人を対象に「長寿を祝う会」を盛大に催しました。また、これらの活動は高齢者と地域のコミュニケーションを図り、地区の活動を盛り上げています。

3) 住民同士の支え合いの仕組みづくりへの協力

地区の特徴を活かした支え合い活動を積極的に展開します。特に冬の除雪などには、各町内会に協力をお願いして、高齢者や障害者世帯の除雪を助力するなど、きめ細かい目配りをしていきたいと思っています。

4) 今後の取り組み

ますます高齢化が進む中、色々な人々に目配りをしていきたいと思っています。人口がますます減り、色々な弱者が今より多くなることは確実で、それを少ない民生委員で見守るのは限界があるように思います。本家、分家、親戚などの相互扶助を引き出すことや、各町内会や各種団体との協力が不可欠ですし、呉羽地区包括センター・保健所・各種老人施設等の公的機関とも連絡を密にしていかなければならないと考えています。

今現在各町内の一割以上が若い人を含めひとり暮らし世帯となっており、先を見ると不安ばかりですが、地域の人たちに頼りながら活動をしていきたいと思っています。

(様式2)

活動強化方策定に向けて

私たちの池多地区では高齢化が著しく、少子化が顕著でますます一人暮らしの方や夫婦とも80歳以上の世帯が増えています。そのため各町内会は限界集落に近い状況になってくると思われます。しかも民生委員も町内の方々とのコミュニケーション不足が考えられます。

新型コロナウイルス以来、各町内の事業が減りそれが当たり前の世の中になっているようです。

こここのところの意識の改革が必要かと思いますが、子どもの参加があつてこそその事業ではないかと思えます。

一昨年、能登地震の当日などを検証すると、池多地区はそれなりに揺れがあつたものの、これといった被害はありませんでした。

しかし池多小学校が避難所となっており、そこに地区外の避難者の方々が5～6組避難してきたのは驚きでした。

また、池多地区の住民の人たちもどう接して良いかわからずそのままでしたが、幸い避難者が少なく、市の職員の方々が対応して事なきを得ました。

しかしながらもっと大勢が避難してきた場合のことを考えると何かマニュアル的なものを作成しなければならないのではと思いました。

《池多地区民生委員児童委員協議会『活動強化方策地域版 2026～2028』》

先の能登半島地震を教訓として、当池多地区として避難先・避難所の開設管理の手順など自治振興会を中心として各町内会別に考えてみて、できればマニュアルを作成する。

また、池多小学校の避難所の開設運営はあくまで市役所が行いますが、手が足りない時や大規模な災害時など住民として何が出来るかを民生委員としてどのように働きかければ良いか取り組んで行きたい。

* 池多地区住民の絆を結び、安心して暮らせる地域を築く

* 多地区の防災への備えと民生委員の役割の明確化(池多地区防災マニュアル)

